

国語

第1 高等学校教科担当教員の意見・評価

1 前 文

令和5年度大学入学共通テスト（以下「共通テスト」という。）は、平成25年度入学生から実施された高等学校学習指導要領（以下「学習指導要領」という。）を踏まえた試験であった。学習指導要領では、総合的な言語能力を育成する「国語総合」を共通必修科目とし、高等学校「国語」において指導する内容の共通性を重視している。

共通テストでは、学習指導要領において育成を目指す資質・能力を踏まえ、知識の理解の質を問う問題や思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題を重視して出題することとなっており、言語を手掛かりとしながら、文章から得られた情報を多面的・多角的な視点から解釈したり、目的や場面等に応じて文章を書いたりする力などを求めることとなっている。

高等学校「国語」教科担当としての立場から、本年度の試験問題を検討した。

「内容・範囲」「分量・程度」「表現・形式」の面から、第1問～第4問それぞれに検討を加えて、評価し意見を述べる。

なお、評価に当たっては、14ページに記載の8つの観点により、総合的に検討を行った。

2 内容・範囲

第1問 二つの文章は、ル・コルビュジエの窓の建築的効果について、二種類の異なる観点から論じたものである。論理的かつ抽象的な文章の内容を的確に読み取る力や、文章の構成に見られる筆者の意図を評価・考察する力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 漢字・熟語・語彙についての基本的な知識・技能を問うている。

問2 ガラス障子によって正岡子規の心が慰められたことについて述べている傍線部直前の内容を、的確に読み取る力を問うている。

問3 ガラス障子が「視覚装置」だといえる理由について、傍線部直前の引用文の内容をもとに的確に読み取る力を問うている。

問4 ル・コルビュジエの窓の設計意図について考察している【文章Ⅰ】の後半の文脈から、彼の窓の特徴と効果についての内容を的確に読み取る力を問うている。

問5 「住宅は沈思黙考の場である」という趣旨で書かれた【文章Ⅱ】全体の文脈を正確に捉え、傍線部の内容を的確に読み取る力を問うている。

問6 (i) 二つの文章における引用文を読み比べ、それぞれの引用の仕方の違いを的確に理解する力を問うている。

(ii) 【文章Ⅰ】における正岡子規の話題に着目して、本文の構成や要旨を的確に理解する力を問うている。

(iii) 【文章Ⅰ】で述べられている正岡子規の話題と、【文章Ⅱ】の「動かぬ視点」を中心とした空間論とを関連させて考察する力を問うている。

第2問 第二次世界大戦直後の食糧難に苦しむ時代に、自身の飢えを解消するために様々に行動する「私」の心情を描いた文章である。「私」の内面の描写が丁寧であり、心情の変化の把握を中心とした文学的な文章を読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 「私」が用意した構想とそれに対する「会長」の反応から、「私」があわてて説明した意図についてその心情を的確に読み取る力を問うている。

問2 広告会社が利益の追求を優先していることに気づかず、理想ばかりを追求していた自身の間抜けさを恥じる「私」の心情を、的確に読み取る力を問うている。

問3 物乞いの「老爺」の切なる願いに対する「私」の心情を、傍線部以前の文脈からの的確に読み取る力を問うている。

問4 飢えに苦しんでいる自らの状況を自覚し、将来への不安を抱くに至る「私」の心情を、文脈からの的確に読み取る力を問うている。

問5 「私」が「課長」に辞職の意を伝える場面を適切に捉え、「私」の発言の意図を的確に読み取る力を問うている。

問6 今の職では満足に食べていけないことに絶望し、その飢えを解消するために新たな生き方を模索しようとする「私」の心情を、的確に読み取る力を問うている。

問7 (i) 本文の内容の理解を深めるために、教師が提示した【資料】と本文とを関連させて【文章】にまとめるという学習の場面を通して、【資料】の内容と本文における「焼けビル」との共通点を的確に理解する力を問うている。

(ii) (i)を踏まえて、本文における「焼けビル」が表す象徴的意味を的確に理解する力を問うている。

第3問 平安時代の『俊頼髓脳』と『散木奇歌集』からの出題で、作者はともに源俊頼。後冷泉天皇の時代、実家に退出した皇后寛子のために殿上人らが遊宴し、連歌を行おうとした場面を取り上げている。敬語を含め、古文特有の語句が多く用いられており、古文を的確に読み取る力、またその内容の豊かさを理解する力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 本文の読解に必要な基本的な単語の知識および、内容を理解する力を問うている。

問2 本文の読解に必要な基本的な文法や敬語の知識および本文の表現を理解する力を問うている。

問3 1～3段落に書かれている登場人物の言動を的確に読み取る力を問うている。

問4 (i) 『散木奇歌集』の内容と掛詞の知識を踏まえて、連歌を的確に読み取る力を問うている。

(ii) (i)を踏まえて、『俊頼髓脳』における連歌の上の句を的確に読み取る力を問うている。

(iii) 話し合いにおいて、他の生徒の意見を踏まえて4・5段落に書かれている内容を的確に読み取る力を問うている。

第4問 中唐の代表的詩人である白居易の詩文集『白氏文集』からの出題。白居易自身が作成した官吏登用試験の【予想問題】とそれに対する【模擬答案】という形式の文章である。漢文に用いられる基本的な知識や句法をもとにして漢文を的確に読み取る力を確認する上で適切な素材文であった。

問1 漢文特有の語についての基本的な知識を問うている。

問2 本文の読解に必要な基本的な句法についての知識を活用して、文脈を的確に読み取る力を問うている。

問3 本文を的確に理解するために必要な訓読のきまりや書き下し文についての基本的な知識・技能を問うている。

問4 「線」や「矢」がどのようなものとして書かれているかについて、前後の文脈とあわせて本文を的確に読み取る力を問うている。

問5 漢文の基本的な句法や語句の解釈を根拠とし、文脈を的確に読み取る力を問うている。

問6 自然の摂理について、本文全体の内容を踏まえて的確に読み取る力を問うている。

問7 君主が賢者と出会わない理由や出会うための方法について、【模擬答案】で述べられている内容を、文章の展開に即して的確に読み取る力を問うている。

3 分量・程度

(1) 設問数について

試験時間80分に対して大問は4問で、大問ごとの設問数は第1問が6問、第2問が7問、第3問が4問、第4問が7問であった。全体の解答数は37で、適切であった。

(昨年度の共通テスト：大問ごとの設問数は、第1問が6問、第2問が5問、第3問が4問、第4問が7問。全体の解答数は36。)

(2) 難易度について

第1問は、二つの本文とも、高等学校の授業で扱う文章レベルとして妥当であった。問6のように、文章を読み比べ、話し合いを通して内容の理解を深める学習過程を意識した設問があり、難易度としては適切であった。

第2問は、本文及び設問中の【資料】、【構想メモ】、【文章】ともに、高等学校の授業で扱う文章レベルとしては妥当であった。昨年度よりも文章量は増えたが、設問中の選択肢数に配慮して出題されていた。設問は、心情や表現を問う設問に加え、問7のように、本文に関する資料を参考にして社会状況や心情を考察するなど、授業における探究活動にもつながるものがあり、難易度として適切であった。

第3問は、本文及び設問中の文章とも、文章量は適切であった。基本的な単語や文法の知識を活用して内容や表現を問う設問に加え、昨年度に引き続き、教師と生徒たちの話し合いの場面を設定し、修辞（掛詞）に着目して内容を考察する設問があり、古文の学習成果を見る難易度としては適切であった。

第4問は、白居易自身が作成した官吏登用試験の【予想問題】と【模擬答案】による出題で、それぞれの内容を読み解く設問として、文章量は適切であった。基本的な語句の知識や、比喩表現が意味する内容を問う設問があり、漢文の学習成果を見る難易度としては適切であった。

全体的には、学習指導要領や生徒の学習の過程を意識した場面設定を踏まえており、分量及び難易度は妥当であった。

4 表現・形式

第1問

〔問6〕ル・コルビュジエの建築について書かれた二つの文章を授業で読んだ複数の生徒が、それぞれの文章中で引用されたル・コルビュジエの文章の内容や引用した筆者の意図を考察するとともに、二つの文章を関連付けて読むことで得られる気付きについて話し合うという学習場面が設定されており、問題作成方針に合致している。

二つの文章の内容について、生徒たちが対話的な学びを通して理解を深めていくという学習の過程を重視した問い方となっており、受験者の日頃の学習活動を踏まえたものであると考えられる。また、配点については設問の内容に見合った配点がなされていた。

第2問

〔問7〕教師から提示された本文と同時代の【資料】を参考にして本文の内容理解を深め、考えたことを文章にまとめるという言語活動を重視した学習場面が設定されており、問題作成方針に合致している。

【資料】の表現に注目した上で本文の表現との共通点を考察し、【構想メモ】を作成して考えたことを【文章】にまとめるという、「書くこと」の指導事項にもつながる出題の工夫が見られた。

【文章】の分量がそれほど多くないことを考慮すると、【構想メモ】を作り、さらにそれを受験者に読ませる必要があったかどうか、また、【文章】に書かれている内容が「考察」として十分なものであるかどうか、検討の余地がある。配点については設問の内容に見合った配点がなされていた。

第3問

〔問4〕本文の内容理解を深めるために、教師が用意した本文と同じ作者による別の文章を参考に、教師の支援を受けながら複数の生徒が対話的に学習を深めていくという学習場面が設定されており、問題作成方針に合致している。

表現や用語も受験者の混乱を招くものではなく、適正であった。また、配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた。

(i)(ii)(iii)いずれも選択肢の数について配慮がなされていたが、本文とは別の文章と比較的長い対話文を読んだ上で設問に答える必要があるため、解答に時間を要した受験者が一定数いたのではないかと考えられる。

第4問

〔問7〕日本文学にも影響を与えた中唐の詩人白居易が、官吏登用試験のために自ら作成した【予想問題】と【模擬答案】からの出題であった。同一の筆者による文章ではあるが、問答形式の体裁をとっており、【予想問題】の趣旨を適切に踏まえた上で、【模擬答案】の内容を叙述に従って精査・解釈しながら読み深めていく力が問われており、問題作成方針に合致している。

表現や用語も受験者の混乱を招くものではなく、適正であった。また、配点についても設問の内容に見合った配点がなされていた。

5 ま と め（総括的な評価）

共通テスト実施3年目となる本年度も知識の理解の質を問う問題や、思考力・判断力・表現力等を発揮して解くことが求められる問題が、生徒の学習の過程が意識された場面設定の中でバランスよく出題されていた。本テストが、高等学校での学習を通して受験者が身に付けた力を評価するのに妥当なものとして作成され、また、生徒の言語能力を育成する高等学校国語科の授業づくりに資することを期待して、意見・要望を以下に示す。

- (1) 「国語総合」の枠の中で学習指導要領に沿った問題作成がなされていた。学習者による「主体的・対話的で深い学び」を踏まえた設問が多く出題されており、二つの文章を読み比べて違いを考察したり双方を関連付けて解釈したりする場面や本文と【資料】との共通点について考察して文章を書く場面など、学習の過程を意識した場面の設定により、平素の学習活動を通して身に付けた力を評価することのできる設問となっている点は評価される。
- (2) いずれの大問においても、本文が比較的平易で適量であり、時間内でテキストの細部を検討したり全体の要旨を把握したりして読み、設問の意図を捉えて選択肢を吟味することが可能であったと思われる。本文と関連付けて考察することを求める【構想メモ】や【文章】も難易度は適切であった。受験者の深い思考を促すよう資料等が効果的に提示された設問の工夫が見られる。次年度以降も、受験者がこのような設問に対して十分に思考し、判断することを通して、本文の理解を深めることができるよう適当な時間が確保されるよう求めたい。

- (3) 共通テストにおいては、生徒が「どのように学ぶか」を重視していることが十分に感じられるものであった。「窓」を題材とした二つの文章を読み比べることによって引用文の用い方の違いを考察することをねらいとした設問の工夫、【資料】と本文との共通点から登場人物の置かれた状況について考察し【構想メモ】と【文章】を作成するという言語活動の設定、連歌を題材とした本文の内容を理解するために他の文章を参考として読み、表現や修辞について考察する学習課題など、授業改善の視点において大いに示唆に富むものであった。
- (4) 全体を通して、多様な題材が準備されている。文学的な文章については、高等学校での学習履歴を踏まえた上で、高校生が読むのにふさわしい多様な題材が用いられることを期待する。出題に当たっては、素材文の魅力や価値を十分に生かし、受験者が文章から得た情報を多面的・多角的な視点から解釈する力を発揮することのできる設問が、すべての大問においてバランスよく出題されるよう工夫していただきたい。また、今後も題材として実用的な文章を含めた多様な文章を活用した出題を期待したい。共通テストにおける出題が高等学校国語科における授業改善を促し、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力を生徒に育成することに資するものとなるよう期待する。